

「新しい東北」官民連携推進協議会
令和6年度 岩手県意見交換会（第1回）議事概要

令和6年7月4日
「新しい東北」官民連携推進協議会事務局

【日 時】令和6年7月4日（木）13:00～15:00

【場 所】岩手復興局／オンライン（Teams）

【出席者】（順不同・敬称略）

＜副代表団体＞

株式会社岩手銀行／岩手県／国立大学法人岩手大学／
特定非営利活動法人 いわて連携復興センター

＜復興庁＞

復興庁 復興知見班／復興庁 岩手復興局

＜事務局＞

株式会社読売エージェンシー／株式会社 JTB

【議事概要】

1 開会

復興庁本庁政策調査官より、参事官、企画調査官の出席が出来ないこと、新しい東北の取り組み全般に携わることの挨拶がなされた。

2 各団体の活動紹介

復興庁、岩手銀行、岩手県、岩手大学、いわて連携復興センターより、取組紹介資料（資料1～資料5）を基に取組を紹介した。

3 令和6年度の取り組み方針、取り組み内容等について

＜本年度企画に関する意見交換＞

事務局から、内陸部と沿岸部を繋ぐ事をテーマとした映像取材ツアー企画、招待状ワークショップの企画説明を実施し、内容に対する意見交換が行われた。

＜主な意見＞

- ・これまでと違って、活動を媒体で発信するという企画は魅力がある。
- ・昨年までの活動は、参加者が集まらないという課題があった。参加対象を内陸部に限定すると参加者が集まらないかもしれない。他県のプログラムでは、県内の学生だけでなく県外の学生も広く募集しており、三陸を巡りながら岩手県の魅力を発信する取り組みとしたほうが良い。また、いわて若者カフェには高校生や大学生だけでなく、39歳までの一般の人参加していると聞いている。そのような人たちに参加いただくのも面白いのではないかと。特に1泊2日の場合、年齢の範囲を広げるのも一つの方法。
- ・昨年の活動は大学生を中心に行われ、1泊2日のイベントであった。今後は高校生も参加できるように、宿泊を伴わない形での参加を検討することが必要ではないかと。
- ・令和5年度の取り組みでは、1年前から議論し、参加学生10名程度の想定で企画された。参加学生の招集を了承したが、参加してくれる学生が集まらなかった。岩手大学にも地域の課題に取り組んでいる学部があるが、活発に活動しているグループの学生でさえ「興味はあるが参加出来ない」など集まらず、今回も声を掛けようと思うが「大丈夫です」と言えないのが現状。県内で学生数が一番多いのは本学だが、それ以外にも声をかけても良いのではないかと。

- ・一昨年、岩手県ふるさと振興部学事振興課が事務局を担い、いわて高等教育地域連携プラットフォームを立ち上げた。岩手大学、県立大、盛岡大学、富士大学、岩手医科大学、岩手保健医療大学、修紅短期大学、一関高専、放送大学岩手学習センターの9機関、それ以外に、岩手県高等学校長協会、県教育委員会などが参加している。事務局である学事振興課あたりに相談して裾野を広げてみては良いかと思う。
- ・昨年は、今年度の計画よりも1か月遅くツアーを実施したため参加者が少なかったが、今年度のスケジュールでは余裕を持てると考える。3つのエリアに絞り、それぞれの地域の魅力を発掘する内容は県も納得している。しかし、高校生の参加には親との関係や1泊2日の際の病気やケガの対応が懸念され、部活や委員会で忙しい生徒は参加が難しい。複数の高校から特徴ある高校をピックアップする必要がある。
- ・「新しい東北」の公式YouTubeでの動画発信で沿岸と内陸が繋がるのか、ということに疑問がある。動画作成は良いが、工夫が必要だと感じる。岩手県に特化した発信方法を見つけ、岩手県の子供たちに伝わる内容にする必要がある。
- ・高校と大学では学校のスケジュールが変わる。3か月程の中・長期のプロジェクトを組むのであれば、前もって実施日を示さなければ、途中でフェードアウトや、学校行事と被り参加できなくなってしまうので気を付ける必要がある。また、若者カフェの利用者傾向を踏まえると、三陸の魅力を伝えることも大切だが、参加したことによりどのようなものが得られるのかが大事。例えば、プロの方に映像編集のスキルを学べるなど、参加することでどんなものを自分が得られるのか伝えた方が参加に繋がると思う。
- ・映像については、アウトプットとして残るので良い。多くの学生の方に参加していただきたいが、参加を呼び掛ける際には映像関係に興味を持つ放送関係の部活動の方にピンポイントであたることなど考えても良い。
- ・招待状ワークショップについては、ここまでの意見交換の中で高校や大学にワークショップの募集をかけるのは難しいと感じる。高校や県庁の協力を得て、大阪万博をゴールにワークショップを実施し、岩手の良いものを発信する取り組みを行うのは良い。
- ・ワークショップを10月から12月に月1回開催する計画だが、参加者が集まるのか、リモートでの話し合いやリアルでの作業が難しいと懸念する。
- ・高校生の参加に関しては、松島高校での校外学習のように特定の学校やクラブ活動の一環として実施するのが良いかと思う。広く参加を募集するのは難しいと感じる。
- ・招待状を特定の学生・機関が考案したというポイントは、特徴として打ち出して良い。
- ・松島高校の生徒が考えた招待状は、個人的な思い出や感動した出来事を含むメッセージを入れることで高評価を得た。参加者には、おすすめの場所についての個人的なメッセージを提供してもらうのが主目的で、ガイドブックの見せ方などはワークショップで簡単に説明するか、事務局に任せる方法でも良い。
- ・岩手県で生まれ育った人たち、震災前から沿岸部で生活している方に参加してもらうのが良い。大学生になって岩手に来たとなると印象が変わる。
- ・映像取材に参加いただく方からも、希望する人がいれば参加してもらう事も検討したほうが良い。集まる人数によっては、映像と招待状のワークショップを併合することも考えられる。

4 閉会

令和6年度の実施方針は「内陸と沿岸部を繋ぐ」をテーマとし、昨年までのツアー設定を活かしながら、新たなアウトプットを踏まえた施策を実施することで了承を得られた。

また、昨年度の反省点として参加者の少なさが挙げられたため、今年度は、副代表団体と協議しながらテーマの設定、参加者への周知を早い段階から行うことで、多くの参加者を集められるようプログラムを構築していくこととした。